

SANNO SPORTS MANAGEMENT

SPORTS MANAGEMENT RESEARCH CENTER, SANNO UNIVERSITY, JAPAN

Vol.

07

Stepping forward

FEATURE
「歩みの先へ」



SANNO UNIVERSITY

マネジメントの理論と実践を柱に 社会で活躍するビジネスパーソンを育成

産業能率大学は、世の中で実際に役に立つ能力を育成する実学教育を根幹としています。

本学の実学教育は、学問としての経営学の成果を踏まえつつ、

現実のビジネス社会、特にマネジメントに関する現実の問題を学生自身で発見し、

状況の変化に適応して問題解決できる能力の育成を重視しています。

また、コンサルティング機関である総合研究所と連携し、

ビジネスの最新情報や最先端の動向を教育に取り入れるべく企業や団体との提携に取り組むなど、

産業界に最も近い大学として学外とのコラボレーションを積極的に進めています。



CONTENTS

FEATURE 「歩みの先へ」

- 03-04 01 情熱をもって前を向く**
湘南ベルマーレ 監督 青 貴哉
- 05-06 02 持っている能力を 100% 使いこなす**
産業能率大学 サッカー部 監督 加藤 望
- 07-08 03 やり続ければ、誰にでもチャンスはある。**
横浜 FC / 産業能率大学 情報マネジメント学部 卒業
2014 年度サッカー部 主将 楠元 秀真
- 09-10 04 「自分らしさ」の先に**
産業能率大学 サッカー部 越智 大和

11-12 05 SANNO SPORTS TOPICS 2014

RESEARCH REPORTS

- 13-14 06 大学とプロスポーツチームのスポーツ連携**
－産業能率大学 collaboration with 湘南ベルマーレ・
スポーツ教室における新プログラム導入の効果と課題－
- 15-16 07 地域振興におけるスポーツの役割**
－東北大震災に直面したプロ・バスケットの事例からの考察－
- 17-18 08 ビーチ再生**
－ Sport Policy for Japan 2014 優秀賞－
- 19-20 09 SANNO スポーツマネジメントのあゆみ**
- 21 研究員紹介・編集後記**



01

情熱をもって前を向く

湘南ベルマーレ 監督 曹 貴裁

インタビュー・文：椎野 睦

「Begaistrung（ベガイストレング）」。“情熱・熱意・夢中”という意味のドイツ語である。これはドイツ留学時代に曹監督が称賛された精神である。今回は選手や観客を Begaistrung させる湘南スタイルを指揮する曹監督にインタビューした。

— 監督として、ベルマーレの歩みを振り返って感じることは？

曹：ベルマーレをトップチームにしたいと頑張ってきました。選手もスタッフも阿吽の呼吸になれる人が増えましたが、馴れ合いにならないように、いい意味で緊張感は大切にしています。J1だからとか、監督4年目だからとか、そういうことで特別にこれからやるべきことを変えるということはありません。

— 監督が日頃から大切にしているものは？

曹：何かをやるときに情熱が一番失ってはいけないものだと思います。人と関わる以上、情熱が変わったり無くなったりした

ら人に対して失礼だと思うので、私は自分が関わった人を大事にして、恩返しをしたいという気持ちからも情熱を大切にしています。そして監督になったから、J1になったから変わるというものではなく、それはあたりまえのもので、だれかに作られたものでも、言われてやるものでもなく、自分の中から自然に出てくるものを感じています。

— 選手のモチベーションについてはどのように考えますか？

曹：モチベーションはすべての基本だと思います。何もせずモチベーションを上げて維持できる選手もいます。そういう選手でさえモチベーションを上げる行動を監督からもらえれば、モチベーションは維持できるし、更に向上します。モチベー

ションが右往左往する選手はこっちの働きかけでコントロールしてあげなきゃいけないし、逆にほっとかなきゃいけないときもあります。リーダーとして大事なのは、常に見て、準備し、いつ言う（対応する）のか言わないのかを見極めることだと思います。

— “悩み”とはどのように向き合いますか？

曹：自分の力でどうにもできないことに頭を悩ませたくないの
で、自分の力でなんとかできることを考えます。結果として
「前向きにしていること」が一番です。勿論無理して前向き
になる必要はありません。物事には悩みがありますが、最終
的には「よしやってやろう」と前向きに思える方が良いと思
います。物事に取り組む際、結果に関わらず自分が出来るこ
とを全部やる。その源は「前向きな考え方」とか「前向きな
生き方」にあると思います。例えば、僕が監督を解任された
としたら、一般的には凄くネガティブなことです。ですが僕
にとって「こういう経験をしたことが次に繋がる」という考
え方をすれば、間違いなく良い経験になります。経験とは考
え方によってマイナスにもプラスにもなります。そんな前提
が僕にはあります。

— 選手の中には前向きになれない人もいるのでは？

曹：理由を聞いて“こうすればいい”と助言することもあるし、
逆に自分で気付くまでほっとくこともあります。後向きな選



手がいるということはポジティブに言えば「いつか前向きに
なる」ということでもあります。ずーっと後向きであること
はありません。一番難しいケースは「後ろ向きにも前向きに
もやらない淡々と」です。淡々とやる人間は「淡々と」なんで、
淡々と「自分は自分ですよ。雨が降ろうか槍が降ろうか」に
なりきってしまいます。それは人として怖い。今のウチ（ベ
ルマーレ）には「淡々と」はいません。僕は日頃から情熱が
伝わりやすいサッカーを大切にしています。それは“ボール
（パス）は縦方向に”という湘南スタイルとも関係しています。

— これからのチームの成長に大切なことは？

曹：「監督が言うことを遂行して全て完璧に」というのではなく、
自分たちが試合に勝つために、いま何をすべきで何ををしては
いけないのかという「ピッチの中での自立や自己判断」が
増えていくことです。それが最終的にないと一流のプロサッ
カー選手とはいえません。僕の指導とかやり方を一旦通過し
て、次の新しい世界に自分で飛び立とうとできるようになっ
てほしいです。自分の力で新しい壁を乗り越えようとする姿
勢になってほしい。その基礎は作ってきたつもりです。本当
の成長とは、指導者が何を考えているのか、何を求めている
ということを通り越した自己判断が勝利に繋がるというこ
とであり、そういう選手になってほしいです。

時には成長段階で言われたことだけをやることもあります。
何も考えずにそれに勤しみ、型を作ることも時には大切です。
ただ「自分がどうありたいか」を大切に、何かに情熱を燃
やして、それに取り組むことが大事だと思います。「淡々と」
な人にはそれがない。それじゃたった1回の人生つまらない。
それは学校教育・勉強も一緒だと思います。先生が教えてく
れることを淡々とやることもできます。それが必要なときも
あります。でも本当の勉強はそれが全てではないと思います。

— これからの学生 / 若者に一言

曹：人と同じでなくていい。周囲の色に染まり人と同じでなけれ
ば生きていけないというのではなく、自分の中の大事にして
いる部分を磨き、自分というものをありのまま大切にしてい
たいです。

曹 貴裁

ちょう・きじえ

湘南ベルマーレ 監督

早稲田大学卒業後に、91年日立製作所サッカー部に所属。その後、柏レイソル（92年）、浦和レッズ（94年）、ヴィッセル神戸（96年）で活躍。97年の引退後は、ドイツ・ケルン体育大学に留学、セレッソ大阪トップチームヘッドコーチ、湘南ベルマーレジュニアユース監督を歴任。12年より湘南ベルマーレトップチーム監督に就任、J1リーグ復帰へチームを導く。

持っている能力を100% 使いこなす

産業能率大学 サッカー部 監督 加藤 望

インタビュー・文：木村 剛

昨シーズン、関東リーグ2部という新たなステージに挑んだ産業能率大学サッカー部。当初はそのハードルの高さに苦しみましたが、最終戦で目標であった2部残留を決めました。苦しい中で学んだこと、さらに進化するためには何が必要なのか、サッカー部加藤望監督に伺いました。

乗り越えてわかった壁の高さ

— 今日はお疲れのところありがとうございます。昨シーズンは目標の残留おめでとうございました。まず昨シーズンを振り返ってみて、率直なご感想をお伺いしたいのですが。

(加藤監督：以下敬称略) シーズンに入る前から、厳しいシーズンになることはもちろん分かっていました。監督以下、スタッフ、選手とも初めての2部という中で、懸命に練習を重ね準備して臨みましたが、どこが通用して、どこが足りないかは試行錯誤しながらやっていくしかないと考えていました。

— 通用したものとしなかったものがあったということですね。

加藤：通用すると感じたのは走るということ。他のチームと比べても、ウチのチームが走り負けていると感じたことはありません。全員で走って、全員で攻撃する。これはウチのチームのカラーでもあり「走る」ことは通用すると。逆に難しいと感じたものは、個人の技術が通用しない。それならチーム力で補いたいところですが、それを補う戦い方も持っていないということでした。もちろん、個々のレベルアップを考えて練習はしていましたが、前期はそうした状態で、なかなか結果を出すことができませんでした。

— 後期に入ってから少しずつ結果も出てくるようになってきたと思うのですが、短い期間の中でどのような点を変革させていかれたのでしょうか。

加藤：敗戦が続く中で、スタッフと何度も話し合い、戦い方についての考え方そのものを根本から変えていきました。ウチのサッカーは走ること、つまり早い攻撃というのが持ち味です。ですが、個人の技術が足りないところにスピードを求めると当然ミスも多くなります。あせりも出てきます。その結果、相手により多くのチャンスを与えてしまうことになっていました。



—— 根本的に変えたというところは？

加藤：そこで、少しスピードを落としてもより正確性を重視していると考え方を変えました。選手にはそれまでの現状について示したうえで、これではだめだと。だからこれからはこういう戦い方をして行こう、ということをピッチの中やミーティングで根気強く説明していきました。

—— 通用すると考えていた「走る」こと、そして通用する武器である速さを捨てて、正確性を大事にしているということのほとても大きな決断だったと思うのですが。

加藤：考えていたのは、土台を固めてから次に進みたいということでした。次に進むためには、一歩下がって正確性を高める。それが出来るようになったら、速さを高める。あくまで目標は変わっていませんでしたから考え方にブレはありませんでした。

—— そうした考え方は、選手にどのように浸透させていかれたのでしょうか。

加藤：負けていた時も強く感じていたのは、スタッフはもちろんですが、選手自身が「成長しようという意欲」を持ち続けたことです。ミーティングの中でも、トレーニングをしているときも、そしてピッチの中で1つ1つうまくいったことを確認して次に進みました。だから選手も、今やっていることは正しいのだと信じて続けられたのではないかと思います。ピッチの中で自信につながってくる。そうすると不思議なもので、練習を続けていくと、急に伸びてくる選手もいたりするんです。

敗戦の中で続けたこと

—— 具体的に練習方法などは変えられたのでしょうか。

加藤：もちろん練習の質は変えました。以前は全員で一緒にトレーニングをしていましたが、昇格してからは、練習を絞り込んで行うようにしました。というのも、練習でやるのが細かくなったからです。ただ大事にしていたのは、個人個人が「持っている能力を100%使いこなしているか」という点です。

—— 敗戦が続いていると、当然チームの雰囲気は良くないのではないかと思います。その中でどのような点を心掛けて、選手に向き合っていたのでしょうか。

加藤：雰囲気は確かに良くなかったですが、出来るようになったこと、向上したところを1つひとつ確認するようにしました。選手も試行錯誤の中で練習していますから、向上したところ



や改善したところについて、「今これ出来たよね」とか「ここが良くなったね」ということをピッチの中で確認していくと、選手も今やっていることが間違っていないこと、自分では今一つ判然としないことでも、それが認めてもらえると今やっていることを肯定して次に進むことができます。それを繰り返し、焦らずにやってきたことでしょうか。それを信じて続けているうちに、後期の中盤くらいには、ある程度の手ごたえをつかむことができました。

今シーズンの目標

—— 最後に今シーズンの目標をお聞かせ下さい。

加藤：昨シーズンと同じく残留が1つの目標にはなると思いますが、監督としては、その質について見ていきたいと思っています。結果は同じでも、1つ1つのプレーが向上しているかどうか。また、現在うちのチームには110名の部員がいますが、当然試合に出られないメンバーが90名いることになります。この90名が何をするかを考えさせることが重要です。全員で戦うことに意味がある。それを実行できるかどうかチーム力につながっていくと思います。それが目標です。

—— 今シーズンのご活躍を期待しております。ありがとうございました。

インタビュー後記

一言でいえば、とにかく真面目な監督でした。こちらが質問すると、1つ1つ言葉を慎重に選び、考え考え話して下さる姿がとても印象的でした。最後に「1番リラックスできる時間は？」とお聞きすると、「家族といるときと愛犬のトイプードルと散歩しているとき」と照れくさそうに教えてくれました。今シーズンのご活躍をお祈りしています。

加藤 望

かとう・のぞむ

産業能率大学サッカー部監督。東海大学卒業後、日立製作所サッカー部（現 柏レイソル）にて2004年まで活躍。2005年に湘南ベルマーレに移籍、2009年 Jリーグ功労選手賞。2009年より湘南ベルマーレコーチを経て、2013年4月 産業能率大学サッカー部監督に就任。



03

やり続ければ、 誰にでもチャンスはある。

横浜 FC / 産業能率大学 情報マネジメント学部 卒業
2014年度サッカー部 主将 楠元 秀真

インタビュー・文：小野田 哲弥、白土 由佳

幼い頃から、当たり前のようにボールを蹴っていた。将来の夢はサッカー選手だった。しかし、周りにはいつも、自分よりうまい選手が大勢いた。それでもひたむきに、ただ自分がすべきことを努力し続けた彼はJリーガーとなり、三浦知良選手がJ2戦最年長得点記録を決めたその日、初出場にして初ゴールを決めた。華々しいデビューを自分の足で着実に踏みしめた楠元選手に、これまでの歩みと、その先に目指すものについて聞いた。

周りは上手な人ばかり

—— サッカーを始めたきっかけを教えてください。

楠元：まず兄がサッカーをやっていて、その影響です。とりあえず、兄がやっていることは何でも追いかけてやっていました。2歳違いの兄が小学生で僕が幼稚園の頃に始めました。地域の子供達が集まっている習志野の実翔マリンスターズというチームです。この前も顔を出したんですけど、コーチ陣も変わらずやっていました。僕がいた頃は、先輩にうまい人が大勢いました。小学1年生や2年生の頃に、5・6年生の人と一緒にやることも多くて、レベルの差を感じていました。周りは上手な人ばかりだなあって。ポジションは昔からずっとディフェンスをやっていました。

好きなことをやりなさい

—— ご両親がサッカーを勧めたのですか？

楠元：もともと、好きなことをやりなさいというのが家の教育方針でした。サッカーをやりなさいと言われたわけではなかつ

たんです。だから、小学生の頃からずっとサッカーをやっていますが、途中で、テニスもバスケもやりました。両親とも、スポーツはまったくやらないタイプなんですけどね。もしかしたら、サッカーよりバスケの方が得意だったかもしれません。今でも、バスケやってたらどうなったかなって考えることはあります。腕も長いので、仲間のサッカー選手にも「おまえ、バスケやれば?!」って冗談で言われたりして。

パスをつないでゴールに向かう

—— 中学、高校ではどのようにサッカーをしていたのでしょうか。

楠元：中学も、地域の公立の学校でした。クラブチームと中学の部活動とで悩みましたが、兄がクラブチームでやっていたこともあって、同じ道を選びました。ただ、兄と一緒に試合に出ると、あれこれとダメなところを言われたりして、それで泣いたりもしていました。泣き虫だったんですね、僕。目立ついい選手というわけでもなくて、その頃の仲間に「何でおまえがプロになったんだよ」って言われるくらいです。その後、クラブチームのコーチが講師として勤めている敬愛学園高校へ進学しました。クラブチームで教えてもらってい

たサッカーが好きだったことがきっかけです。細かいパスを繋いでゴールに向かうっていう考え方のサッカーでした。だから、今は武器と言われているロングキックなんかは、一切練習したことはありませんでした。大学に入学して、監督に練習を勧められてからです。

大学で成長した精神面

— では、小中高を通じて一番成長を感じるのはどのような面ですか？

楠元：一番成長を感じるのは気持ちの面ですね。どれだけ技術を磨いても、グラウンドに立ってそれを発揮できるかどうかは気持ちの面が大きいと思うんです。大学でも、僕が一年生の頃の上級生はうまいばかりで、県リーグのレベルじゃないといつも感じていました。でも、多くの人に応援されてグラウンドに立って、声援の中という空気に圧倒されてしまって、皆、全然自分のプレーが出来てなかったんです。でも僕自身は、大学入学後、精神面が最も伸びた面だと思っています。気持ちの面で少しずつ自信を持っていけたことが徐々に良い方向に向かわせてくれたと感じています。

チームの将来、自分の将来

— 2014年度を振り返って、どうでしたか？

楠元：途中、こんなに負けこむとは思っていなかったのですが…ただ、何より関東2部リーグに残留できて良かったと思っています。昔との違いを考えると、まず、応援が変わりましたね。加藤監督が、試合に出ているからこそ応援を頑張るという参加の仕方を教えてくれたんです。それで、チームが一つにまとまっているという感覚が自分達の中に芽生えてきて、一致団結できたからこそ、奇跡的に残留できたのではないかと思っています。試合に出ている選手が調子悪いと、なぜか出ている選手も調子が良くないんですね。だから、全体としてチームを作っていくということの大切さを感じています。県リーグから関東2部リーグに昇格しても、基本的にはやることは変わらないので、重荷に感じることはありませんでした。元々の将来の夢であるプロにも近づいたし、何より、毎週の試合で成長できている実感があって楽しかったです。

— どのような経緯でプロになったのでしょうか？

楠元：関東2部リーグで戦っているうちに、たまたま横浜FCのキャンプに誘われて、その時たまたま、ものすごく調子が良くて。それから練習試合に誘われたりを経て、強化指定選手

に選ばれて。もうここしかなかったから、「行くしかない」と飛び込んだ感じです。これからはプロとしてお金をいただいてサッカーをするし、大卒で即戦力として採ってもらったということもあるので、しっかり結果を出していきたいと思っています。10年後も、できればサッカーをしたいですね。プロの世界って誰でも経験できるわけではないので、もう今の状況で十分って思う気持ちも正直あるんです。でも、ずっとサッカーしていきたいですね。契約をしてもらい続けること、毎日サッカーをし続けることが一番難しいので、気を抜かずにやっていきたいです。



後輩達へのメッセージ

— 最後に、本学初のJリーガーとして後輩達に伝えたいことをお願いします。

楠元：これからも、産業能率大学からJリーガーは輩出されると思います。今も「こいつうまいな」って思う後輩は何人もいるんです。でも、本人次第だと思います。いくらこちらが期待しても、本人が頑張らないとプロにはなれないので。途中で折れたら終わりなので、続けることしかないと。たとえ負け試合だとしても、自分の気持ちをしっかり持って、全力でやって欲しいと思っています。今、プロになって、大学生だったのに全然遊んでいないって笑われることもあるんですけど、でもサッカーをやり続けるしかなかったから、遊ぶ暇なんてありませんでした。やり続けられれば、誰にでもチャンスはあると思っています。

楠元 秀真

くすもと・しゅうま

横浜FC所属・ポジションDF

1992年生まれ。2011年度に産業能率大学情報マネジメント学部に入學し、2014年度卒業。実効マリンスターズ（～05年）、FC稲毛（～08年）、敬愛学園高等学校（～11年）を経て、2014年度はサッカー部キャプテンを務め、関東リーグ2部残留の要として活躍した。

04

「自分らしさ」の先に

産業能率大学 サッカー部 越智 大和

インタビュー・文：小野田 哲弥、白土 由佳

4人兄弟の末っ子として生まれ、父や兄たちの背中を追うように自然とサッカーを始めた少年は、今やU-17、18、19と日本代表候補としてゴールを狙うストライカーとなった。そんな彼だが、海外遠征先ではWi-Fiを探し、産業能率大学の試合結果をチェックする愛校心も覗かせる。U-19日本代表候補として、産業能率大学サッカー部エースとして活躍する越智選手は何を考えたか、試合に臨んでいるのか、これまでの歩みと、これからのロードマップについて聞いた。



シュート練習が好きだった

—— サッカーを始めたきっかけを教えてください。

越智：父が地元の小学生サッカーチームの監督だったことと、男4人兄弟の末っ子ということもあり、自然とサッカーを始めました。兄たちが皆サッカーをやっていたので、最初はとにかく、兄についていきたいという思いが大きかったですね。でも、兄弟それぞれ性格もポジションも全然違って、例えば性格は、長男は真面目なんですけど、次男、三男とやんちゃになっていって。今も、家族皆で僕の試合の結果を気にかけてくれたりして、サッカー好きな一家です。

四国で出会った生涯のライバル

—— 小・中学時代はどのようにサッカーをしていましたか？

越智：小・中学校は公立の学校に通っていて、部活動では県大会でもすぐ負けてしまうこともありました。小学校が終わる時に四国代表で呼ばれて、その時に初めて県外の選手と会って。仲良くなった同期では、ドルトムントに行った丸岡満という選手がいるんですけど、もう、ずっと一番のライバルで、負けたくないという気持ちがあります。

お手本はJリーグ得点王経験者

—— その後、高校ではいかがでしたか？

越智：サンフレッチェ広島のカースに入ることになって、提携していた高校に入学しました。サッカー以外の高校生活に関しても、カースの寮長が厳しいこともあって、真面目に授業に臨ん

でいました。プロを間近で見られる場所で、人数が足りない時はユースからも数名参加したりと、技術や体格の差を感じられて、プロを目指す上でとてもいい環境でした。特に僕がFWで、プロとユースが同じフォーメーションということもあって、3年間、佐藤寿人選手から学ぶことばかりでした。試合観戦でも、常に目で追って、学べるだけ学ぼうとしていました。周りのレベルが上がるにつれて、当然DFも複雑になってくるんですけど、やっぱりサッカーって点を取らないと勝てなくて。だから、90分間フルで頭を使い続ける、考え続ける必要性があって、その方法を常に学ぼうとしていました。それ以外にも、身体づくりなど試合以外の場のことも知ることが出来て、今でも目標とするプレイヤーの一人です。ユースの仲間にしても、皆プロを目指していることもあってとても上手で、中学までとは生活ががらっと変わりました。周りのレベルが高いからこそ、最初は何より自分を出していくことを頑張っていました。自分の特徴を知って、それをどう活かしたら試合に勝てるか、そのためにどうすればいいか頭を使って。その結果、1年生の頃からスタメンとして試合に参加できました。自分を出すことに力を入れながら徐々にチームに馴染んでいき、仲間と切磋琢磨していくという毎



日でした。

監督は、サンフレッチェのユースで15年程監督経験のある方で、とにかく熱い方でした。今はU-15の日本代表監督をやっている方なのですが、そこで育ったということが強烈な印象として残っていて、今の自分を作っていると思っています。人生の中で一番密度の濃い時期でした。

初めての代表戦

—— 初めて代表候補として呼ばれたのはいつごろですか？

越智：高校2年生の時、この年代を立ち上げるということになって、それからずっと、怪我をしたとき以外は呼ばれています。FW 仲間とはライバルというよりも、お互いのいい動き方についての意見交換など、どんどん高めあう関係という感じがすね。外国の選手と対戦してみて、体つきはやはり同年代とは思えないことも多かったんですけど、プレーしてみると通用するところも結構あって、気負わず試合に臨みました。代表とユースはそれぞれサッカースタイルが違っていたので、代表は代表、と切り替えていました。何より周りの方がうまくて絶対ボールが出てくるので、そこからとにかく自分を出していこう、というふうに臨んでいました。

大学は「自分が成長できる場所」

—— 大学に入学した経緯を教えてください。

越智：高校3年生になってからユースの監督が変わり、それまでと大きくシステムが変わったことから、なかなか納得のいくサッカーが出来ずにいました。プロになれなかったことも、それが大きいといえばそうなのですが、ただそれは言い訳に過ぎなくて、自分の向上心が足りなかったんだと思います。プロ以外の選択肢としてサッカーの強豪校というのがありますが、僕はプロを第一志望にしていたので、大学は全て断るようになっていました。そんな中、高校3年生の夏ごろに、ユースから産能大サッカー部に移っていたコーチの方から、進路を心配した連絡をいただいて。その人を信頼していたこともあって、卒業後すぐのプロの道がなくなってからは迷うことなく産能大への進学を決めました。強豪校でないということは全然気にしていませんでした。スタッフへの信頼が大きかったので、ここで自分が成長できる自信がありました。

産能率大学の伝統を創る

—— 周りの学生は、越智君のレベルの高さに驚いていたようですが、ご自身からはどうでしたか？

越智：もともと、周りがどうということはあまり気にしないタイプなので、自分がどう成長するか、まずはスタメンを取って、と、そういうことだけを考えていました。4年間自分を鍛えて、その後プロになるという目標に向かってたどすべきことをしようと。

最初は声も出ていなくて、というところもあったのですが、徐々にいいチームになってきていると思います。特に攻撃の面では、自分達の良さを出していけば点を取れると思うし、もっと精度を上げることと、それぞれが積極的にゴールに向かっていけばより良くなっていくと思います。今年も新しく1年生が入ってきていますが、彼らがのびのびと出来るように、去年自分達の代が経験していることを伝えて、1年生を引っ張っていきたくと思っています。自分を出す、自分の良さを出すことが一番だと思っているので、練習内での声掛けはもちろん、練習外でもそういう話をして、いい環境づくりを心がけています。

関東リーグに居続けることが今のチームの目標で、それが一つの伝統になっていくといいと思っています。やはり、1部リーグのチームは、選手それぞれが自分達の良さを知っているし、試合中のコミュニケーションが豊富に感じられます。チームとしての良さを理解してやっているということが伝統につながっていると思うので、それは今のチームにまだ足りない部分だと思っています。

プロの先にあるもの

—— 大学に入学して得られたことは何でしょうか。

越智：高校を卒業してすぐにプロになることと一番違うのは、授業など大学でしか学べないことがあるということです。今までサッカーはボールを蹴ることしか知らなかったのですが、サッカーに関わる様々な企業のことなど、今までとは違う視点を得ることが出来ました。また、特にサッカー選手は寿命が短いので、セカンドキャリアを考えられるという点も大きいです。これからもしっかりと勉強していきたいと考えています。

まずは、自分の基盤をこの大学で作っていこうと今は考えています。卒業後にプロになることを目指し、同時に人間としても成長していく4年間を過ごしたいと思っています。



越智 大和

おち・やまと

産能率大学サッカー部所属・ポジション FW

1995年生まれ。2014年度に産能率大学 情報マネジメント学部に入學。四国中央市立土居中学校からサンフレッチェ広島ユース（～13年）を経て、2013年はサンフレッチェ広島と2種登録選手として活躍。U-17（12年）、U-18（13年）、U-19（14年）と日本代表候補選出。

3/21

サッカー部 越智選手が
U-19 日本代表候補選手に選出



ミャンマー遠征をはじめFWにて活躍。
U-19日本代表候補選手は産業能率大学初。

6/15

2014 FIFA ワールドカップ
ブラジル パブリック
ビューイング開催



学生有志が企画したイベントは、学生・
教職員や卒業生、高校生、近隣のご家族
連れなど約300人が集まりました。

5/31

産業能率大学
スペシャルデー開催



湘南ベルマーレ VS 東京ヴェルディ戦。
得点は1-0にて湘南ベルマーレが勝利!!

05

SANNO SPORTS TOPICS

11/9

Sport Policy for Japan
2014 にて小野田ゼミが
優秀賞を受賞



ビーチバレーボールをはじめとするビーチ
スポーツの環境保全を目的に、小さな頃から
地域を通じて地引綱に取り組むことで、「ビーチ
再生」を目指す提言で、優秀賞を受賞。

10/18

SANNO CUP 2014 開催



ビーチバレーボールを広めるイベントとして、
「イベントプロデュース」の学生が企画、運営。
年々規模が拡大し、神奈川、東京から23チーム
207選手が参加する盛大なイベントに!

11/15

サッカー部
関東リーグ 2部残留決定



一喜一憂の試合展開が
続く中、最後の最後に得点
を決め、平成国際大学に
勝利。リーグ2部残留が
決まる。

8/9

産業能率大学 スペシャルゲーム開催



本学と提携関係にある「横浜 DeNA ベイスターズ」のファームチームの公式戦を舞台に、情報マネジメント学部開講「スポーツ企画プロジェクト」の履修生13名が企画した観戦イベントを開催。

8/10

全日本ビーチバレー 大学男女選手権で優勝



荒天による決勝戦中止による優勝も、足立選手・沢目選手ペアが優勝！大学日本一！

9/21

第3回 SANN0 オープン開催



女子ビーチバレー部が企画運営に携わる日本ビーチバレーボール連盟公認大会。キャンパス内外から9チームが参加。

2014

スポーツとマネジメントの実践を通じた活動は、7年目を迎えた今年、様々な形で成果を結んだ1年となりました。学生有志により企画されたパブリックビューイングは、大学の枠組みを越え、地域の方々を多く迎えたイベントとして、その成長の証ともいえる成果を出しました。サッカー部越智選手はU-19日本代表候補に選出され、国際試合に挑戦しました。また、Jリーガー楠元選手が誕生しました。そして、女子ビーチバレー部の大学選手権での優勝、提携関係にあるチームとのイベントもすべて、今目の前にある課題とどう向き合うかが一人ひとりに求められた瞬間であったことは間違いありません。2014年、それぞれにとっての“身の丈を越えた挑戦”に果敢に向き合った学生の活動を紹介します。

第33回大山登攀競技 大会開催

12/19



湘南キャンパスから長距離部門は大山阿夫利神社下社までの6.4キロ、短距離部門は中継地点までの4.4キロを走る大会。第33回目を迎え、合計30チームの出場も怪我無く無事に全チーム完走！

'15
1/12

サッカー部 楠元選手が 横浜 FC に加入



サッカー部主将楠元秀真選手が、横浜 FC に加入。産業能率大学出身のJリーガーとして活躍が期待されます！

'15
2/7

産業能率大学 スペシャルゲーム開催



横浜文化体育館にて横浜ビー・コルセアーズの公式戦に本学の名を冠した「産業能率大学スペシャルゲーム」(対埼玉ブロンコス)を開催。75-68で見事横浜ビー・コルセアーズの勝利！試合当日は、本学学生がインターンシップとして、会場設営、誘導、試合運営、終了後の清掃等実施しました。

大学とプロスポーツチームの スポーツ連携

—産業能率大学 collaboration with 湘南ベルマーレ・ スポーツ教室における新プログラム導入の効果と課題—

情報マネジメント学部 教授 **中川 直樹** / 情報マネジメント学部 教授 **渡邊 隆嗣**

産業能率大学 collaboration with 湘南ベルマーレスポーツ教室は、NPO 法人湘南ベルマーレスポーツクラブにて取り組んでいる種目中心として、毎月1回、年間で11回開催されている。これまでの参加者は、湘南ベルマーレや競技団体等からの勧誘を受けたチームの小学生が大半を占め、個人参加者は少なかった。スポーツの普及および振興を目指すためには、個人参加者、特に初心者へスポーツ参加の機会を提供することは極めて重要であると考えられる。そこで、2014年度に初心者を対象としたプログラム導入を試みたので、本稿ではその効果と今後の課題について報告する。

大学とプロスポーツチームの連携による スポーツ教室

「産業能率大学 collaboration with 湘南ベルマーレ スポーツ教室」(以下、スポーツ教室と略す)は、本学の持つスポーツ施設と湘南ベルマーレの有する指導者や指導ノウハウを活用して、伊勢原市や平塚市を中心とした地域のスポーツ振興に貢献する目的で2008年から開始された。

スポーツ教室は立ち上げから順調に回数を重ね、2013年度には参加者の合計が500名を超える規模となった。そしてこの6年の間に、スポーツ教室参加者アンケートや伊勢原市スポーツ環境調査¹⁾により参加者のスポーツ教室に対するニーズに関するデータを蓄積することができた。そこで、2014年度のスポーツ教室を開講するにあたり、参加者のニーズを分析し企画したプログラムが、初心者を主対象とした月1回、4回シリーズで開催する「初心者サッカークリニック」である。そしてこのクリニックでは、サッカーのプレイを楽しむ基礎となる「ドリブル」、「パス」、「シュート」および「ゲームテクニック」を各回のテーマとして掲げて開催した。

本稿では、4回シリーズのクリニックへ初めて子どもが参加した日に保護者向けに実施したアンケート(以下参加者アンケートと記す)とおよび最終回に2回以上参加した子どもの保護者向けに実施したアンケート(以下最終回アンケートと記す)の集計結果について報告を行う。

新プログラム導入の効果 初心者の参加が増加

2013年度までのサッカー(フットサルを含む)教室では、対象を小学生としその技術レベルは特に限定していなかった。しかし参加者は、すでにサッカークラブ(チーム)に所属している子ども達が大半を占めており、日頃からトレーニングを継続している子ども達が多かった。そこで新プログラムとして、「初心者サッカークリニック」と謳って参加者を募ったところ、「サッカークリニック(教室)に初参加」と回答した参加者が全体の32%(19名)となった。また、参加が2回目までの子ども達を含めると全体の56%(33名)、3回目までを含めると64%(38名)となり、以前のサッカー教室とは異なり参加者は募集対象とした初心者が中心となった(図1)。さらに、その参加者のうち53%(10名)が、運動部やスポーツクラブへの加入率が最も高いと報告されている9歳より幼い子ども達であった²⁾(図2)。

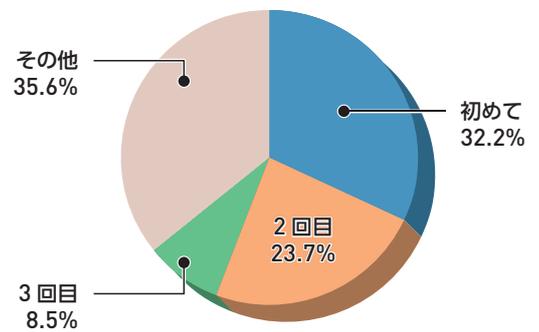


図1. 過去のサッカークリニック(教室)への参加回数

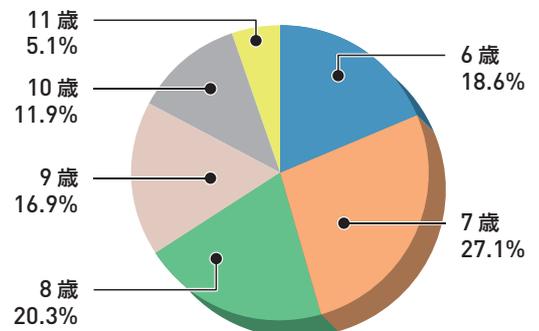


図2. 参加者の年齢

なぜ9歳未満の初心者子ども達の参加が多くなったかを推察すると、運動部やスポーツクラブへの入部を検討するための体験として捉えていることが1つの理由として考えられた。しかし、最終回アンケートにて2回以上参加した子ども(30名)の行動や考え方の変化を保護者に質問したところ、「サッカーチームへの入部を検討し始めた子ども」や「入部を希望する子ども」の人数は、各2名に留まった。一方、参加者アンケートにてサッカークリニックで実施して欲しいプログラムについて質問すると、「週1回や月1回開催で通年参加できるプログラムを希望する」が38名中14名、「個人で参加できるプログラムを希望する」が15名から挙がった(図3)。したがって、今回参加した初心者は、サッカーを続けるとしてもチームやクラブのように高頻度で参加する形態ではなく、習い事のように週1回や月1回の頻度での参加を希望していたことが窺えた。

新プログラム導入の課題

2014年度の初心者サッカークリニックにて行った参加者アンケートの自由記述において、「初心者対象のクリニックと違って参加したが、中には初心者には見えない子どももいて子ども達が戸惑っていた面も見られたので、年齢別ではなく経験別にクラス編成をして欲しい」という意見が複数あった。この点については主催者側の参加人数を多くしたいという意向が関係しているが、今後は初心者を中心としたクリニック運営ができるよう、クラス編成に対する配慮が必要である。最終回アンケートの結果として、「サッカーを楽しむことに満足できた」と回答したのが全体の87%に達していたのに対し（図6）、「サッカーの技術を身につけることに満足できた」と回答したのが60%に留まったのは、こうした課題を反映している可能性が考えられる（図7）。

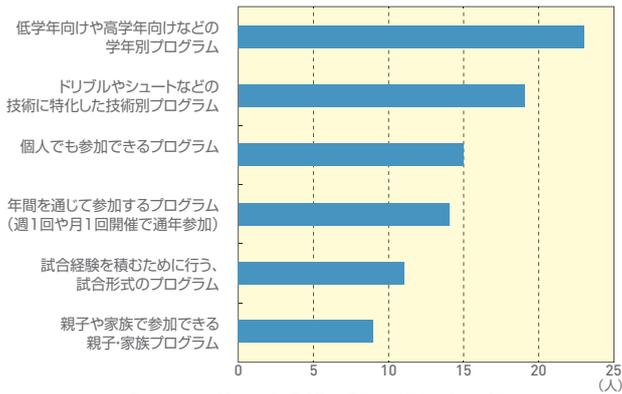


図3. サッカークリニックにて希望するプログラム(複数回答)

参加のきっかけは「広報いせはら」

2014年度のサッカークリニックに初心者として参加した子ども38名のうち20名は、伊勢原市在住であった（図4）。その20名の参加のきっかけを参加者アンケートにて質問したところ、80%（16名）が「広報いせはらの記事を見て」を挙げていた（図5）。これまで、毎回のスポーツ教室への参加者募集記事を「広報いせはら」に掲載していたが、アンケート調査結果から募集記事を見て参加する人が少なく、期待した効果を得られないでいた。しかし、2014年度の参加者募集記事に明確に「初心者」を謳ったことで子ども達の参加に繋がったことを考えると、「広報いせはら」の記事が読まれていないのではなく、読者層のニーズを上手く掘り起こすことができていなかった結果であることが考えられた。参加者アンケートにて、サッカークリニック（教室）への初参加者に対しこれまでに参加しなかった理由を質問すると、「初心者だけを対象としたクリニック（教室）がなかったから」という回答が最も多かったことから、前述の考えが妥当であることが裏付けされる。

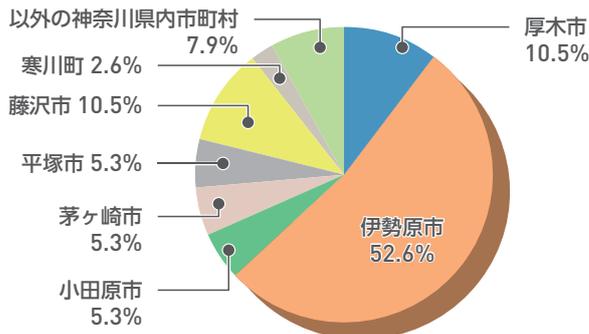


図4. 参加者の居住地域

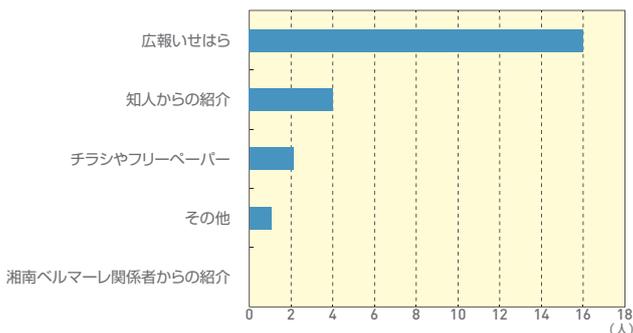


図5. サッカークリニックの情報源(複数回答)

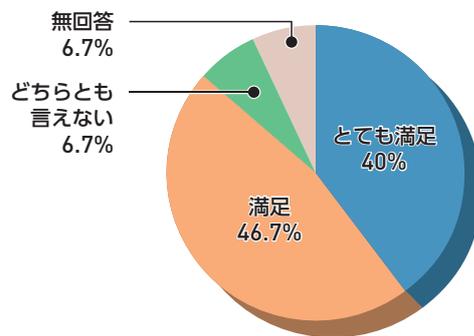


図6. サッカークリニックの満足度(サッカーを楽しむ)

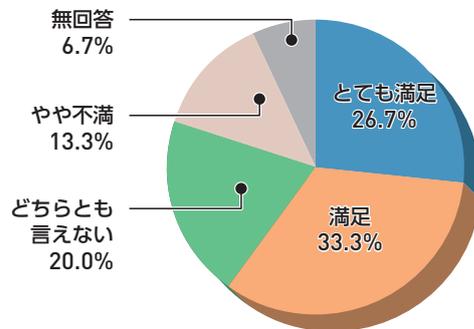


図7. サッカークリニックの満足度(技術を身につける)

初心者サッカークリニックは月1回開催であったので、子ども達が家庭でも復習をして次回に参加してもらいたい意図から、指導を行ったコーチからポイントを簡単にまとめたおさらい資料（A4版1枚）を毎回配布した。この資料の活用度を最終回アンケートにて質問したところ、「役に立った」が全体の43%であったのに対し、「あまり役に立たなかった」、「分からない」が37%となり検討の余地が残された。活用できなかった理由としては、「子どもだけでは読めない漢字が使われていた」や「図が分かり難い」などの意見があった。この点に関してはより参加者視点での検討が必要であると考えられる。また、マンパワーや制作時間、さらには情報管理上の課題はあるものの、動画での資料提供についても検討する価値があるのではないかと考えられた。

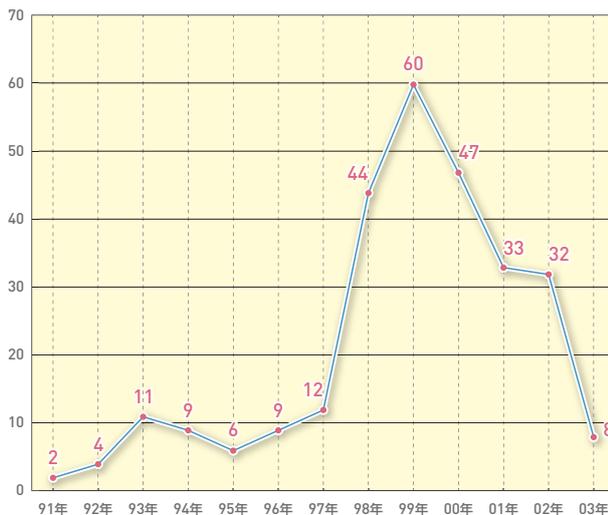
参考資料

1. 伊勢原市スポーツ環境調査報告書 産業能率大学スポーツマネジメント研究所 2012年10月 (<http://smrc.mi.sanno.ac.jp/smrc/magazine/isehara2012/top.html>)
2. 平成25年度 神奈川県児童生徒体力・運動能力調査報告書 神奈川県教育委員会 平成26年5月

地域振興とスポーツ

長く続いた景気の低迷を受けて、わが国のプロ・スポーツは徐々にではあるが衰退傾向にあるといつてよい。これまでも本誌ではすでに述べてきたが、プロ野球（NPB）、Jリーグなどの一部のメジャー・スポーツを除いて、多くのスポーツ・カテゴリーで撤退や解散、縮小が相次いだ。その理由は我が国のプロ・スポーツの多くが、企業スポンサーの強力なサポートによって存続してきたからに他ならない。景気悪化→コスト削減要請→スポンサーの打ち切り・縮小→スポーツからの撤退・縮小という流れは、この20年間、日本のプロ・スポーツ界が直面してきた大きな潮流であった。

[スポーツから撤退する企業]



出典：スポーツデザイン研究所調べより作図

こうした状況の中で、多くのプロ・スポーツではその対策の1つとして「地域密着」を掲げ、これまで以上に、地元へ貢献し地元の人々から愛されるチーム作りをすすめ、過度のスポンサー依存からの脱却を図ってきた。日本でも、Jリーグは設立当初から地域密着を志向しているし、プロ野球も、北海道に日本ハム、宮城県に楽天ゴールデンイーグルスが移転・設立されるなど全国に分散し、より地域色を明確に打ち出す傾向にある。元々、欧米のプロ・スポーツの多くは地域密着を強く志向してきた。チーム名に地域名を入れるだけでなく、地元ホームグラウンドやアリーナを作り、地元ファンとの関係性を高めていく。チームは地元の誇りであり、愛すべき対象となる。一言でいえば、強固な関係性（リレーションシップ）をベースにしたビジネスモデルの構築である。その意味で、この20年は日本のプロ・スポーツが、地域との関係性をいかに高めて、構

築していくべきなのかを真剣に考え始めた時期でもあった。

そうした地域密着の取り組みを進めていく中で、大きな事件が起こった。東日本大震災である。震災以後、被災した東北地方を中心に体育館や球場の使用が困難になるといったハード面での影響はもちろんのこと、有力スポンサーが業務に支障をきたしてサポートが出来なくなり、スポンサーをやむを得ず降りてしまったところも多い。さらにソフト面に目を向けると、スポーツのようなイベントごとには、自粛ムードが根強くあり、たとえ再開できる環境が整っても、すぐに興行を再開する事は出来なかった。これは興行収入を主たる収益源とするプロ・スポーツにとっては死活問題である。こうした動きは被災した地域だけでなく、日本全国に波及した。コンサートなどの各種イベントはもちろんのこと、TVのバラエティ番組も再開するきっかけがつかめないまま、自粛を続ける状況がしばらく続いたことは記憶に新しい。

震災から4年が経過した今、地域に対して、スポーツに何ができるのか、どのような役割を果たせるのか、それを総括しておくことには一定の意味がある。そこで本報告では、この未曾有の危機に直面したbjリーグの2つのチームの対応や取組みの事例から、スポーツと地域振興のあり方について考察してみたい。最初に断っておくと、今回取り上げた仙台89ERSと福島ファイヤーボンズは、異なるアプローチからスポーツを通じた地域貢献の可能性を示す事例である。以下、それぞれのチームの震災以後の対応について紹介する^(注1)。

仙台89ERSの事例

宮城県は、今回の震災で最も被害を受けた地域の1つであることは言うまでもない。あれから4年が経過し、震災翌年からリーグに復帰したチームは、その後健全に運営されている。観客数については震災前の8割程度までに回復しているという。

しかしその復活は容易なものではなく、一時は解散の危機に瀕していた。震災があったのは金曜日のことで、翌週末には試合が予定されていた。試合会場は避難場所には指定されていなかったものの、天井の一部が剥がれ落ちたり、スプリンクラーが作動して水浸しになったり、試合をできるような状況ではなかったという。その後、1週間を経ずに残りの公式戦全ての中止が決定し、チケット収入の道が絶たれた。そこで新聞各紙に取り上げられたのが、仙台89ERSの選手全員契約解除という衝撃的なニュースであった。収入の道が絶たれば契約解除はやむをえないこととは言え、これは全国的に報道され大きな波紋を呼んだ。

その当時の状況について仙台89ERS地域活動担当の川村氏は次のように語っている。「この措置は運営会社を残すために不可欠な措置でした。どうにかしてチームを存続させたい。一度解散してしまえば、再び立ち上げるのはほぼ不可能です。いつか復活するため

の受け皿を守りたかった」そこでまず残ったスタッフが行った主な活動は、スポンサーへの報告であった。地元スポンサーは地域スポーツにとって不可欠な存在であるが、チームも被災者だがスポンサーも被災者であるという状態の中で、撤退もやむを得ない状況であったことは想像に難くない。しかし、そこで仙台のスタッフに寄せられたのは、存続してほしいという願いであった。結局、数社は撤退したが、多くのスポンサーが減額したものの継続してくれた。これが復帰への1つの原動力になった。



一連のスポンサーへの報告が終わった後、スタッフは地域貢献の道を模索する。「社員のほか辛いチアが残っていたので、被災地を回り、地域活動を行いました」（同川村氏）その頃の記録は地元の新聞各紙で取り上げられ、沈みがちな被災地を元気づけていたことがうかがえる。そうした地道な活動は、具体的な形となって表れることになる。チームの存続を願う20000人を超えるブースターの署名が集まり、コミッショナーに届けられたのである。当初は数千人の規模を予定していたことを考えるとこれは破格の数字といえる。こうした地域の人々の願いがチーム復活を決定づけた。

福島ファイヤーボンズの事例

一方、福島ファイヤーボンズは、2014年シーズンからbjリーグに参入し、今季初のシーズンを戦っている。福島は原発の問題もあり、復興がなかなか進んでいない。では、何故そうした状況の中で、プロ・バスケットボールのチームを誕生させたのだろうか。その理由について、福島ファイヤーボンズの宮田代表に率直に伺ったところ、以下のような回答を頂いた。

福島の運営母体はFSG カレッジリーグという専門学校を複数運営する会社である。宮田代表によれば、設立のきっかけは、福島が受けた震災の影響が大きな要因となっていることのことであった。震災後、文部科学省などが発表している児童の運動量についてのデータが発表されてみると、福島の児童の運動量の低下が著しく、全国平均を大きく下回るものであったという。もちろん、この低下は震災と無関係ではない。子供を安心して運動させられる場所が減ったことや、汚染の心配から運動を控えているなどといった影響が出ていることが明白であった。そこで、FSG カレッジリーグでは、bj アカデミーが主催しているキッズバスケット、ジュニアバ

スケットなどの運営や仕組みを福島で実現したいという目的から、教育の一環としてバスケットに関わっていった。このキッズバスケット、ジュニアバスケットの取り組みとは、bjリーグが2008年から実施しているもので、「子どもたちに“楽しく”バスケットボールに触れてもらう」ことを目的として実施されているのである。「世界で活躍する選手を育てる」ことを大きな理念とし、幼児から中学生までを対象としたバスケットボールスクールを展開するとともに、大会運営（bjリーグカップ）や学校訪問（スクールキャラバン）、スキル検定（スキルアップテスト）等を通じてバスケットボールの普及を図るという取り組みである。この事業を福島で展開することが、当初の目的だったのである。

「当時はbjのトップチームを立ち上げる予定は全くありませんでした（同宮田氏）」しかし、その後アカデミー事業が軌道に乗り始めたころから、選手による指導や触れ合いの必要性を感じ、最終的にトップチームを立ち上げることになる。教育効果の観点からも、主体となるトップチームが必要となった。このように、教育をきっかけとしてトップチームを作るという経緯は、他のbjチームとは逆のプロセスといえる。「うちの選手には契約の段階で、こうした教育やアカデミーへの参加についての話をしています。もし、それができないなら契約できないと。だからうちの選手は全員が教室や各種イベントに参加します（同宮田氏）」

観客にとって、選手と触れ合える、直接教えてもらえるというのは何よりもうれしいものであることは言うまでもない。そうした設立の経緯もあって、まだ1年目のチームであるが試合会場には子供からお年寄りまで、他の試合会場と比べても多くの世代の人が集まっていることがうかがえる。運動不足に悩む地域の問題に対して、プロ・スポーツがきっかけを作った事例といえよう。

今後の課題

今回は震災という大きな事件に直面した2つのチームに焦点を当てて、チームと地域との関連について考察した。2つの事例に共通して言えるのは、スポーツは、人々を元気づけ、一体感を醸成出来るパワーを持っているということである。その意味で、プロ・スポーツが地域との関係性を高めていくことは戦略的にも正しい。有力な企業スポンサーとの関係を維持しつつ、徐々にその依存度を低め、バランスの良い体制を保つことが、当面、日本のプロ・スポーツが採るべき戦略である。その意味で、今回の震災は悲しく厳しい出来事であったが、プロ・スポーツにとって教訓を示してくれたともいえる。

今回、取材に協力した戴いたチームのほかにも、東北には多くのプロ・チームがある。実際に現場に行ってみると、地元の熱気は非常に強いものであった。そこで今後の課題となるのは、震災で1つになった地元の心をいつまで保ち続けられるのか、その一体感が薄れてきたときにどのようにマネジメントするのかという点である。いずれにせよ、プロ・スポーツが存続していくためには、地元との良好な関係性をいかに維持し、高めていくかが分水嶺となる。地元の熱を引き出し、かつ冷まさない工夫が必要なのである。

(注1) 本稿の記述に関しては、両チームの方々にインタビューおよび資料の提供について多大なるご協力を頂いた。特に仙台89ERS川村 亜紀氏、福島ファイヤーボンズ代表取締役宮田 英治氏にはお忙しい中、インタビューや資料のご提供など様々なご協力を頂いた。ここに謝意を表したい。

Sport Policy for Japan (SPJ) とは、大学3年生が所属大学の枠を超えて政策提言を行う「スポーツ政策学生会議」であり、東日本大震災に見舞われた2011年にスタートした。2013年9月に2020年の夏季オリンピック・パラリンピック開催都市が東京に決定したことを受け、2014年度の大会からはJOC（日本オリンピック委員会）の公認大会ともなった。

SPJ2014は11月8日（土）・9日（日）、一橋大学国立キャンパスにおいて開催され、「ビーチ再生」を政策提言テーマにした産業能率大学小野田哲弥ゼミが優秀賞に輝いた。この受賞は学生たちの努力と研鑽の成果であると同時に、本研究所を中心とした本学の教育・研究活動の蓄積が結実したものである。よってその概要と意義について報告する。

問題意識：政策実施が不可欠な日本の砂浜

日本の海水浴場が抱える問題点の多くが、堰を切ったように表面化したのが2014年であった。たとえば千葉県九十九里町において、以前は36か所あった海水浴場が砂の浸食等により20か所へと激減したニュースは我々に衝撃を与えた。また神奈川県逗子市が、海水浴場の治安悪化に歯止めをかけるべく施行した厳格な条例（飲酒のみならずスピーカーでBGMを流すことさえ禁止）は、市民以外をも巻き込んで激しい賛否両論を呼んだ。小野田ゼミでは2011年度の初回大会よりSPJに参加しているが、上記のような報道やSNS上の議論を踏まえ、2014年度のテーマ「ビーチ再生」を選んだ。

当該テーマに取り組むに当たり、まず実施したのが文献調査とインターネット調査である。前者ではSPJを主催する笹川スポーツ財

団の各種刊行物に目を通し、【種目別運動・スポーツ実施率の動向（上位10種目）】において、2000年には11.2%で6位につけていた「海水浴」が徐々に順位を落とし、2010年には圏外となっている事実を突き止めた。また後者は全国1000人アンケートによって捕捉した^{*1}。アンケート結果によれば、日本人の大半が自然海岸を貴重な財産と捉え、砂浜での運動は健康促進効果があり、海水浴が子どもの情操教育に良いと回答していた。その反面、自由記述で尋ねた【砂浜海岸や海水浴場に対するイメージ】では、防災面（津波や高波が心配）、衛生面（水が汚く臭くてゴミが多い）、治安面（マナー違反が多くなる）に関するネガティブな意見も数多く見られた。

これらの結果より、砂浜の重要性認識は日本国民のほぼ総意であるにも関わらず、その現状は理想像と大きくかけ離れている。すなわち日本のビーチは、多くの人々（社会）がその課題解決を願う対象、まさに「政策」を必要としている対象だと気づかされたのである。



SPJ2014における発表風景（2014年11月9日（日）一橋大学国立キャンパス）



審査員からの質疑に対して、熱心に答弁する小野田ゼミチーム（左上から清水友菜、三田裕美子、落合勇太、平山仁大）

受賞の決め手：現場への綿密な取材

SPJ2014にエントリーした学生数は16大学^{*2}の総勢158名であった。全33チームが予選プレゼンテーションを行うが、その中から決勝に進出できるのはわずか3チームであり、その3チームの中の1チームに最優秀賞、残る2チームに優秀賞が授与される^{*3}。

毎年SPJにはスポーツ系学群を専攻する日本有数の大学生たちが参加しており、これまでに小野田ゼミが決勝進出を果たしたことは一度もなく、今回も不可能と思われた。しかしその予想は良い意味で裏切られた。

受賞の決め手となったのは、豊富な“取材”に基づく事実の裏付けと政策立案の説得力であった。だがそれは、小野田ゼミチームの

インタビューを快諾してくださり、貴重な情報提供をいただいた関係者様の皆様の多大なるご尽力の賜物である。【表1】に掲載させていただき、紙面を通して改めて厚く御礼を申し上げます。

表1.「ビーチ再生」に関する取材の記録（肩書は当時）

No.	実施日	ご所属	部署・肩書	ご担当者様
1	8月21日(木)	茅ヶ崎市役所	農業水産課	矢野 哲也 様
2	8月27日(水)	平塚市役所	みどり公園・水辺課	佐藤 智紀 様
3	8月29日(水)	藤沢土木事務所	なぎさ港湾課	佐々木 常光 様
4	9月4日(火)	藤沢市役所	観光課	竹上 直輝 様
5	9月7日(日)	NPO 法人 Save the Beach	理事長	西村 晃一 様
6	9月30日(火)	日本ビーチバレー連盟	副理事長	川合 庶 様
7	10月20日(月)	逗子市役所	観光課	池田 祐一 様



審査委員長の玉木正之氏とともに優秀賞受賞の記念撮影

政策提言：ビジョンを支える施策「地引網」

日本のビーチ政策に精通した上述関係者の支援により、ビーチ再生に重要な論点を「養浜」「景観」「衛生」「行事」「多様性」などに集約し、著名な『Jリーグ百年構想』をモチーフにした【表2】の将来ビジョン『ビーチ再生100年構想』を掲げることができた。

表2. ビーチ再生100年構想

ビーチ再生100年構想	(参考) Jリーグ百年構想
海への畏敬の念と海の恵みに感謝することを忘れず、美しい景観を後世に残す。	あなたの町に、緑の芝生におおわれた広場やスポーツ施設をつくること。
日本のビーチを、様々なレジャーやスポーツを楽しむことのできる、憩いの場にする。	サッカーに限らず、あなたがやりたい競技を楽しむスポーツクラブをつくること。
「観る」「食べる」「参加する」。ビーチを通して世代を超えた触れ合いの輪を広げる。	「観る」「する」「参加する」。スポーツを通して世代を超えた触れ合いの場を広げること。

そして、具体的な施策として提案したのがニュースポーツ「地引網」の普及である。地引網は幅広い世代が気軽に参加でき地域の絆が深まるだけでなく、獲った魚を調理することにより生命の尊さを学ぶこともできる。毎年恒例で行えば、環境モニタリングにもなり、地域で連携して年々ゴミの量を減らし、水質を改善する動機づけにもなる。

小野田ゼミチームが強調したのは教育行政での支援、とりわけ小学生が親子で参加する林間学校/臨海学校での地引網導入であった。なぜなら、海上や砂の上で様々なスポーツを体験し、身体を動かすことの楽しさを知れるだけでなく、海洋汚染や防災意識について学ぶ絶好の機会となるためだ。そうして親から子へとビーチ再生意識が受け継がれていけば、100年後の日本では、きっと綺麗な砂浜で盛んにスポーツが行われているに違いない。

地球温暖化によって昼間の運動が制限され、海面上昇によって砂浜が消滅し、水質汚濁によってマリンスポーツの実施が危ぶまれるなど、環境問題がスポーツの実施を左右する時代へと突入している。ビーチスポーツは海と日差しを抜きに存在しえないからこそ、他の競技以上に環境に対して敏感な意識を生む。津波の恐怖に晒された地震大国であり、京都議定書（1997年）のホスト国、さらには2020年の五輪開催国である日本が、スポーツ、環境そして文化で世界を先導することを目指した政策提言、それが「ビーチ再生」である。

本学の特長が活かした受賞



川合 庶

スポーツマネジメント研究所 客員研究員
公益財団法人 日本バレーボール協会
ビーチバレーボール事業本部 強化部長
湘南ベルマーレ ビーチバレーチーム
ゼネラルマネージャー
産業能率大学 女子ビーチバレー部 ヘッドコーチ

長年ビーチに携わってきた者として、今回の受賞をたいへん喜ばしく感じている。協力を惜しまなかった関係者の多くも、学生たちの着眼点に共鳴し、問題意識を世の中に周知してくれたことに感謝しているのではあるまいか。

具体的な施策として提案された「地引網」は、何が掛かるかわからない“天然のガチャガチャ”のような魅力も秘めている。普及に力を入れる平塚市のお手伝いをするところもあるが、参加する子どもたちは皆ワクワクして目を輝かせている。教育的価値の高い健全なニュースポーツであり、日本全国に拡がることを願っている。

ちなみに受賞メンバーの一人である清水友菜は、U-21日本代表にも選ばれた本学女子ビーチバレー部のキャプテンだ。普通であれば競技にだけ専念させるところだが、文武両道を目指す産業能率大学の方針のおかげで、競技以外でも賞を手にすることができた。彼女にとって、かけがえのない財産となったに違いない。

実際、学業にも力を入れる大学生選手は人間として成長し、自然とその真摯さが伝わって支援者が増える。「セカンドキャリア」をはじめアスリートの競技後の人生を考える上でも、Sport Policy for Japan の活動は素晴らしい意義を持っている。

※1 全国1000人アンケートは、2014年7月11日に、20代から60代の各世代男女同数の均等割合を行ったネット調査会社モニターに対して実施した。主な質問の肯定率は以下の通り。島国日本にとって自然海岸は貴重な財産だと思う⇒89.9%、砂浜を裸足で歩くことは健康に良いことだと思う⇒70.8%、子どもにとって海水浴は大切な人生経験だと思う⇒82.5%。

※2 SPJ2014に参加した16大学は50音順で次の通り。桜美林大学、大阪体育大学、神奈川大学、札幌大学、産業能率大学、順天堂大学、尚美学園大学、大東文化大学、筑波大学、桐蔭横浜大学、東海大学、東北学院大学、徳島大学、一橋大学、福山大学、早稲田大学。

※3 SPJ2014の最優秀賞は、徳島大学ウェルネスコースの「Jクラブを活用したプロシューマー創出戦略～学生ボランティア体験プログラムを通して～」が受賞した。小野田ゼミと同じく優秀賞を受賞したのは、一橋大学岡本ゼミBの「明日から始められる次世代型自転車通勤」であった。

09

SANNO スポーツマネ

産業能率大学は、湘南ベルマーレ、横浜 DeNA ベイスターズ、横浜ビー・コルセアーズと提携関係を結び、情報マネジメント学部の授業科目の共同開発や研究活動を行ない、大学の行事や活動への協力など、数々の取り組みを展開してきました。本学のスポーツマネジメントの今日までの取組みについて紹介します。



2004年1月、湘南ベルマーレと提携。大学では初となるJリーグチームのユニフォームスポンサーとして、2004年度から湘南ベルマーレの胸ユニフォームスポンサーとなる。

湘南ベルマーレのホームグラウンドで本学学生、自由が丘産能短大生とそれぞれの卒業生、教職員、父母等関係者が集う、SANNO サックスデー（現産業能率大学スペシャルデー）を開催。



スポーツビジネスをマネジメントできる人材の育成を共に推進するため、共同授業の開発などを柱とした業務提携を行う。



横浜ベイスターズ（現横浜 DeNA ベイスターズ）のファームチーム公式戦を教材に、教室で得た知識を現場で実践し、球団経営や公式戦運営を学生が体験する「スポーツ企画プロジェクト」を開催。



2面あるコートは、公式戦の開催も可能。300名収容の観客席やナイター設備を完備。本学女子ビーチバレー部が主に使用。トッププロ選手の練習場としての活用も期待され、2008年7月には北京五輪日本代表選手が直前練習に使用。



「ビーチバレーをもっと身近なスポーツに！」をテーマに、学生が主体となって開催するビーチバレーフェスタ。本学ビーチバレーコートを会場に近隣小学生を招待。エキシビジョンマッチ、小学生チーム対抗のビーチバレー大会や、選手からの直接指導の時間など、ビーチバレー色のイベントを開催。

2004	湘南ベルマーレと提携	1月
	「スポーツビジネス実践講座」開講	4月
	SANNO サックスデー開催 [湘南ベルマーレ 1-3 アビスパ福岡]	6月23日
2005	SANNO サックスデー開催 [湘南ベルマーレ 2-1 モンテディオ山形]	7月13日
	スポーツマネジメント科目2科目を開講	4月
	SANNO スペシャルデー開催 [湘南ベルマーレ 1-2 柏レイソル]	6月21日
	サッカー強化・人材育成プロジェクト開始	10月
	湘南キャンパス第1・第2グラウンド改修	10月
2006	横浜ベイスターズと提携	1月
	サッカー一部監督に坂下博之氏が就任	2月 1日
	情報マネジメント学部にスポーツマネジメントコースを開設	4月
	「スポーツ企画プロジェクト」開講	4月
	SANNO スペシャルデー開催 [湘南ベルマーレ 2-4 京都サンガ F.C.]	6月27日
	産業能率大学 スペシャルゲーム開催 横浜ファーム戦イベント「シレックス応援祭り」開催	8月14日
	スポーツマネジメント研究所設置	10月
	女子ビーチバレー部発足 川合庶氏がヘッドコーチ就任	10月
	湘南キャンパスにビーチバレーコート竣工	12月16日
2007	湘南ベルマーレ・沖縄キャンプにて選手・コーチ陣を対象とする キャリア支援プログラムを実施	1月
	ビーチバレーコート開設記念式典実施	4月 7日
	SANNO スポーツクラブ collaboration with 湘南ベルマーレ スタート	5月
	SANNO スペシャルデー開催 [湘南ベルマーレ 1-1 モンテディオ山形]	6月25日
	産業能率大学スペシャルゲーム開催 横浜ファーム戦イベント「史上最大のスイカ祭り！」開催	8月30日
	サッカー部 関東2部昇格への初挑戦	11月
	東京アパッチ 産業能率大学スペシャルゲーム開催 [東京アパッチ 91-90 大阪エヴェッサ]	11月20日
2008	SANNO スペシャルデー開催 [湘南ベルマーレ 3-2 コンサドーレ札幌]	6月21日
	第21回全日本ビーチバレー 大学男女選手権大会で準優勝	8月
	産業能率大学 スペシャルゲーム開催 横浜ファーム戦イベント「昼休みの思い出」開催	8月18日
	神奈川県大学 サッカー秋季リーグ出場	10月18日
2009	ビーチバレーフェスタ2009開催	11月14日

ジメントのあゆみ (2004 ~ 2013)



女子ビーチバレー部より2ペアが
出場。大原選手・中村選手ペア、
準優勝。小林選手・八木選手ペア、
5位タイ。



日本ビーチバレー連盟公認大会を本
学湘南キャンパスビーチバレーコート
にて開催。女子ビーチバレー部
中村選手が大会運営責任者として携
わる。



プロバスケットボールリーグ
であるbjリーグ(現TKbjリー
グ)「横浜ビー・コルセアーズ」
と提携。神奈川県内のスポ
ーツチームとの提携は、「湘南ベ
ルマーレ」(2004年に提携)、
「横浜 DeNA ベイスターズ」
(2007年に提携)に続き3チ
ーム目。



明海大学と引き分け、PK 戦の末に
見事勝利。悲願の2部昇格を決める！

清江選手・石田選手が平成22年度日本バレーボール協会
ビーチバレー強化委員会 強化指定選手に選出

SANNO スペシャルデー開催 [湘南ベルマーレ 1-3 ガンバ大阪]

第22回全日本ビーチバレー 大学男女選手権大会にて準優勝

ビーチバレーフェスタ2010開催

第16回アジアオリンピック評議会 アジア競技大会出場
女子ビーチバレー部 清江選手

サッカー部 関東大学サッカー大会出場

産業能率大学 スペシャルデー開催 [湘南ベルマーレ 2-0 ザスパ草津]

関東大学ビーチバレー選手権大会で優勝

第26回ユニバーシアード競技大会出場
女子ビーチバレー部 石田選手

FIVB ビーチバレージュニア世界選手権出場
女子ビーチバレー部 石田選手

産業能率大学 スペシャルゲーム2011開催
横浜ファーム戦イベント「最初で最後のスカリンピック!! ~おっつ! カレー Summer 9.23~」開催

SANNO ビーチバレーフェスタ2011開催

サッカー部 関東大学サッカー大会出場

ビーチバレー SANNO オープン2011開催

産業能率大学 スペシャルデー開催 [湘南ベルマーレ 1-0 カターレ富山]

全日本ビーチバレー 大学男女選手権大会で初優勝

第21回よこすかカレゲーム・産業能率大学スペシャルゲーム開催

SANNO CUP 2012開催

サッカー部 関東大学サッカー大会出場

第2回 アジア大学ビーチバレー選手権大会

横浜ビー・コルセアーズと提携

横浜ビー・コルセアーズ 産業能率大学スペシャルゲーム
[横浜ビー・コルセアーズ 95-89 新潟アルビレックス]

サッカー部監督に加藤望氏が就任

産業能率大学 スペシャルデー [湘南ベルマーレ 0-2 サンフレッチェ広島]

全日本ビーチバレー 大学男女選手権大会準優勝

産業能率大学スペシャルゲーム開催
横浜ファーム戦イベント「野球・夏祭り」開催

SANNO CUP 2013開催

ビーチバレー SANNO オープン2013開催

サッカー部 関東リーグ2部昇格!

5月

5月16日

8月

10月16日

11月

11月

5月29日

7月

8月

8月

9月11日

10月15日

11月

12月18日

6月 9日

8月12日

9月29日

10月20日

11月

11月30日

12月 6日

1月26日

4月

5月25日

8月11日

8月27日

10月13日

10月21日

11月24日

■ 研究所長



渡邊 隆嗣

産業能率大学
情報マネジメント学部 教授

■ 研究員



中川 直樹

産業能率大学
情報マネジメント学部 教授

■ 研究員



小野田 哲弥

産業能率大学
情報マネジメント学部 准教授

■ 研究員



椎野 睦

産業能率大学
情報マネジメント学部 准教授

■ 研究員



木村 剛

産業能率大学
経営学部 准教授

■ 研究員



白土 由佳

産業能率大学
経営学部 講師

■ 客員研究員



川合 俊一

日本ビーチバレーボール連盟
会長
㈱ケイ・プロス代表

■ 客員研究員



川合 庶

産業能率大学
女子ビーチバレー部 ヘッドコーチ
産業能率大学
情報マネジメント学部 兼任講師

■ 客員研究員



水谷 尚人

㈱ SEA Global 代表取締役
産業能率大学
情報マネジメント学部 兼任講師

■ 客員研究員



西野 努

㈱ SEA Global 取締役
産業能率大学 客員教授

■ 客員研究員



中島 靖弘

NPO法人湘南ベルマーレスポーツ
クラブ トライアスロンチーム
ヘッドコーチ

■ 客員研究員



廣田 和生

横浜ビー・コルセアーズ 代表

※研究員肩書きは2015年4月1日現在のものです

編集後記

東京オリンピック（2020）開催に向かい、スポーツが我々に与えてくれる効果に期待し、今後もスポーツのあり方を考え続けたいと思います。(W)

橋元選手、越智選手へのインタビューでは、我々教員が普段見る学生としての顔ではない、サッカー選手としての逞しい一面を見ることができ、大変うれしく思っています。産能大サッカー部の今後のますますの活躍を楽しみにしています。(S)

2005年にスタートしたbjリーグも今年10月に開幕する2015-16シーズンをもちて終了となります。今後は新しいリーグに統一されていくことになりますが、日本のバスケットボール界がどのように変わっていくのか、今後も注目していきたいと思ひます。(K)

研究所設立より7年間、多く学びの機会を提供してもらって幸甚な時間を過ごすことができました。2020年まであと5年、スポーツと学びが人を幸せにする共通言語になることを願ひ、2015年、新たな活動のスタートに期待したいと思ひます。(a)

インタビューを通して橋元選手・越智選手の人となりに触れ、プロやユース日本代表に選ばれる人物は、一本芯が通っていると感じました。今後も二人の活躍から目が離れません。彼らに続くニューヒーロー・ヒロインが本学から誕生し、次号で取材できることを願ひています。(O)

スポーツの語源に「担っている荷を一旦降ろす」という意味があることを知りました。老若男女が肩コリと憂うつに悩まされる現代社会。日常生活におけるこころからの荷を一旦降ろし、リフレッシュして快適な人生を送るためにスポーツは効果的だと改めて感じる今日この頃です。(M)

我が国は2020年東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて一歩ずつ歩みを進めています。その歩みの先にどのような「日本」が待っているのか…。あと5年です。(N2)

産能がスポーツ？ プロスポーツと大学の連携？ スポーツの学部のないこの大学が、スポーツマネジメント研究所？ とびっくりさせられたのを、今回はじめて作成に関わり思ひ出しました。今度はその産能のスポーツマネジメント研究所が世の中をびっくりさせられるそんな活動の一助になればと勝手に思っています。(Y)

SANNO SPORTS MANAGEMENT

Vol.07

Editor in Chief

渡邊 隆嗣 Takashi WATANABE

Editorial Staff

中川 直樹	Naoki NAKAGAWA
木村 剛	Tsuyoshi KIMURA
小野田 哲弥	Tetsuya ONODA
椎野 睦	Makoto SHIINO
白土 由佳	Yuka SHIRATSUCHI
長瀬 綾乃	Ayano NAGASE
河原 行雄	Yukio KAWAHARA

SANNO SPORTS MANAGEMENT Vol.07

2015年（平成27年）5月発行

< 編集 / 発行 >

産業能率大学 スポーツマネジメント研究所
〒259-1197 神奈川県伊勢原市上粕屋 1573
TEL:0463(92)2211

©The SANNO Institute of Management. All rights reserved.

SANNO SPORTS MANAGEMENT

SPORTS MANAGEMENT RESEARCH CENTER, SANNO UNIVERSITY, JAPAN

